

彫刻家 上床 利秋

希望とセミの羽化 南砺市いなみ国際木彫大会に参加して

今回のいなみ国際木彫大会のスローガンが「希望」だったので、セミの羽化のドラマチックで夢を感じさせる瞬間を発想したわけだが、時として自分自身の初発の完成イメージはつくりながらも発展していく時がある。

制作4日目の事だった。仕事はほぼ順調に進み、おおよその抜け殻とセミバウアーしている成虫の形が塊として判りかけて彫り進めていた頃である。70歳くらいに見える男性が私に尋ねた。「それはいったい何ですか?」「セミの羽化です。」「なるほど。私は上の成虫よりも抜け殻になった姿に自分を重ねて見てしまいます。」「

これにはちよつと考えさせられた。

なるほど。確かにセミの一生を人は人生に例えることがある。それまで私は成虫になろうとする瞬間のまだ体の色も白っぽくて羽根も完全に伸びきっていない状態を克明に写実表現することが全てだと勘違いしていたようだ。セミは羽化して自由を謳歌してやがて短い一生を終えるが、その前に7年間、土中で地味な生活を強いられながら成長していることを人々は知っている。

鑑賞台として残しておいた地山の部分に、7年間を想像させる表現にすることはできないだろうか?と私はふと考えた。その閃きは、転がっていた端材を利用してセミの頭とおしりを別々に彫り上げてそれぞれ本体地山部分に浮彫のように取り付ける発想につながっていった。そして大急ぎでそのアイデアを形にしたのだった。これは同時期に制作していた様々な国から来ていた彫刻家仲間からも好評だったようだ。とても色濃い10日間の制作だった。

外国人彫刻家や、多くの国内作家とも知り合いになることが出来た。井波の人々は皆親切に接して下さり楽しかった。私を日本代表に推薦してくださった方々が喜んでくださっている様子を確認して、自分の仕事が無事に終えられたような気がした。

2023年9月



制作3日目。



制作10日目(完成)



閉会式スピーチ。



最終日。参加者たちと。